

九州大学総合研究 博物館ニュース

October 2006 No.7

大学博物館のイメージ

九州大学総合研究博物館 館長 嵐 洪



博物館行きとか博物館的という言葉に一般に代表されてきた博物館の古いイメージは、近年ずいぶん違ったものになってきているようである。それは多くは、当の博物館で働く人たちの活動、地道な研究や斬新な企画、展示などの絶えざる努力によってもたらされてきたものであるし、また、近年の文化的、科学的な知識に対する一般の期待の増大といった時代的な背景によっている所も大きいだろう。同様のことは、大学博物館についてもいえる。いやむしろ大学博物館、特に多くの国立大学における大学博物館は、ほとんど無の状態から出発して、この10年ほどの間に、多様に発展し、そのイメージを形成しつつある。もちろん、はるかに昔から独自の博物館を持ち、先進的な取り組みを進めてこられた大学があることは承知している。しかし、この10年ほどの間に新設、拡充された大学博物館が数多いことを考えれば、従来の博物館に対するイメージが、大学内でも急速に変化しつつあると考えてもおかしくはない。大学内には九州大学を例にとっても、数十年にわたる博物館設立要求という準備期間があった。それでも博物館に対するイメージが、従来の一般のイメージを変えつつあるのは、実際に博物館ができ、それが活動を始めてからのことではなかつたらうか。

大学は研究・教育の場であるとともに、社会への主体的な貢献が求められる。大学では社会的に有用な最先端の研究が行われているし、同時に、直に社会に還元することのできないような基礎的な研究も進行している。これらの研究成果や研究のプロセスを、目に見える形で大学外に情報として発信することは、大学の研究の社会への還元という点で大きな意味を持つし、それを行うには、大学博物館は非常に有効な施設である。もちろん博物館が、学内の様々な情報、資料について正確に、系統的に把握・管理していることは欠かせない条件である。

九州大学総合研究博物館は、展示のための独自の建物を持たない博物館として発足し、すでに6年が経過した。こ

の間、展示場を持たないというハンディを、サテライト展示、出張展示、公開講座等の仕掛けで、むしろプラスの方向へ向けてきたように思える。

もちろんそれは博物館員の非常な努力とともに、大学当局の支援、そして地方自治体等関係者との協力があつてのことではある。このような形の多様な情報発信方法は、今後も継続し、発展させなければならない。それでもやはり、博物館に独自の展示場は欠かせない。大学博物館に行けば、その大学の研究・教育活動、研究成果や研究状況、歴史を直接見ることができるというのは、大きな魅力である。新しいキャンパスにふさわしい、広い展示場をもつ博物館は、私たちの大きな期待である。

また、一般にあまり認識も評価もされていないように思われるが、博物館に欠かせないものは、収蔵スペースである。大学内のさまざまな研究成果、その成果を生み出す元となった機器や資料、標本などは、大学のみならず社会の貴重な財産である。この中には、研究発表後、永久に保存されるよう義務づけられた標本や、今後も引き続いて研究に使われるべきものが含まれている。このような資料を大学内で一括管理し、常に利用にたえるような状態で保管することは、博物館のもう一つの重要な任務であるし、これが大学からの情報発信の資源となることはいうまでもない。

博物館では研究は不可欠である。博物館事業の研究はもちろん、館員自身の活発な研究は博物館の存在を活性化させるし、大学博物館の特色を際立たせる所となる。それは大学全体にとって是非必要なことである。

大学全体に対する研究・教育、成果の公開そして資料や情報の保管・管理など、大学博物館の主要な任務は、大学自体のそれと相似である。大学博物館が大学を代表する存在として認識されるべきだと考える所以である。

ハイビスカスの危機!

小島 弘 昭

ハイビスカスは南国沖縄を代表する花の一つである（写真1）。もともと沖縄に自生する植物ではないが、植栽の歴史は古く、1600年代にはすでに植えられていたとの記録が残っている。ハイビスカスは、アオイ科フヨウ属 *Hibiscus* 低木の総称で、一般に基本種であるブツソウゲ *Hibiscus rosa-sinensis* を指すことが多いが、変異に富み、3000以上の園芸品種や雑種が知られている。沖縄で古くから植栽されているものも、このブツソウゲで民家や畑の生垣に使われている。戦後、沖縄ではブツソウゲに比べ、より豪華で色彩豊かな花を咲かせる園芸品種をハワイから導入した。接ぎ木により増やし、最近では、南国ムードを出す効果もあることから、街路樹として各地で植栽されている。

ところが、数年前から沖縄県下で、街路樹を中心とするハイビスカスに異変が現れ始めている（写真2）。花や葉のつきが悪くなり、最終的には枯れてしまう。街路樹には園芸品種が使われており、ブツソウゲに比べ樹自体が弱く、塩害や乾燥で弱り、その後シロアリが入って枯らすというのが一般的な認識のようである。

昨年、琉球大学熱帯生物圏研究センター西表実験所のスタッフからハイビスカス圃場に多数のゾウムシが発生し、圃場が壊滅的状况になったとの話を伺った。ハスオビコブゾウムシ *Desmidophorus crassus* Hubenthal という種で、体長は9～15mmとゾウムシの仲間にしては比較的大形のものである（写真3）。成虫が若枝をかじり、その先の蕾や新葉を枯らす（写真4）。成虫による被害であれば、生育旺盛なハイビスカスが枯れることはないが、成虫が茎に孔をあけて産卵し、ふ化した幼虫は土中に潜り根を加害する（写真5、6）。花芽のつきが悪い株を掘り起こしてみると、根がほとんどなくなるまで食害が進行している。ハイビスカスの異変は、園芸品種が弱いことに加え、本種による加害が大きく影響していると考えられる。

このゾウムシは、沖縄本島から台湾まで分布し、台湾ではオオハマボウ *Hibiscus tiliaceus* を加害することが知られている。沖縄でも、オオハマボウやサキシマフヨウ *H. makinoi* といったフヨウ属植物から得られるが、それほど多い種ではなく、これまでハイビスカスの害虫としても認識されていなかった。しかし、本種の分布する沖縄の各島（沖縄本島、宮古



写真1. ハイビスカス(西表島船浦)

島、石垣島、西表島)を調査したところ、街路樹にハイビスカスが植栽されていればどこにでも見られるほど、本種は蔓延し、被害は予想以上に進行していた。このままの状態が続けば、数年後には沖縄の街路樹からハイビスカスがなくなるほどの勢いといっても過言ではない!

沖縄では古くからブツソウゲが植栽されていたにもかかわらず、このゾウムシによる加害は報告されてない。被害が園芸品種に集中していることから判断し、近年、その植栽の広がりとともにゾウムシが増えた可能性が高い。

ゾウムシはもともと沖縄に生息していた種で、これまで害虫化することなく、在来の植物を利用し目立たず暮らしていた。ところが、人が戦後導入した園芸品種のハイビスカスが食べやすかったのか、沖縄各地での植栽の広がりとともに、それに乗り移り蔓延した。今後、ハイビスカスを守ろうとすれば、早急な対策を検討する必要がある。しかし、もとは沖縄になく、南国ムードを高めるため導入した植物で、一方には、虫を徹底駆除してまでハイビスカスを保護する必要があるのかとの意見もあろう。



写真2. 葉や花のつきが悪いハイビスカス(沖縄自動車道伊芸SA)

観光ブームのあおりを受け、街路樹に外国産ヤシが植栽され、国内にいなかった害虫がまぎれて侵入し、防除に手を焼いている。今回の場合、虫はもともからいたもので状況は少し異なるが、本来の自然にないものを持ち込

んだ人の行為が関わっていることは共通する。生態系のバランスを崩しやすい外来種の導入には、もっと慎重を期すべきである。

(総合研究博物館開示研究系 昆虫学)



写真3. ハスオビコブゾウムシ成虫(イボゾウムシ科)



写真4. 若枝をかじる成虫、溝状の食痕を残す(宮古島福山)

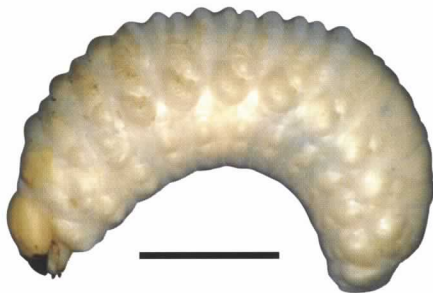


写真5. 幼虫。スケール:5mm



写真6. 幼虫による食害を受けた根(西表島白浜)



写真1. ジュズダマ(福岡県宗像市釣川 2005年12月)

「じゅずだま」の糸穴の秘密

福原美恵子

ジュズダマ (*Coix lacryma-jobi* L.) という植物をご存じでしょうか? トウモロコシに似た姿の水辺に生えるイネ科の植物で、穀物として栽培されるハトムギの原種であり、薬草としても利用されます。福岡県では、川辺

や用水路などでよく見かけます(写真1)。

ジュズダマは秋にさまざまな色や模様の「じゅずだま」を付けます(写真2)。この「じゅずだま」は東南アジアを中心に、首飾り、衣服や頭飾りに縫い止めるビーズとして、また、文字通り数珠の材料として、利用されています。ところで、この「じゅずだま」のツヤツヤした部分は、ジュズダマの果実ではなく、茎を包み込む苞葉が堅く変化したもので「苞葉鞘」と呼ばれています。「じゅずだま」を半分に分けると、花序の基部についた本当の果実(と2つの退化して花をつけなくなった小穂)



写真2. いろいろな色と模様の「じゅずだま」

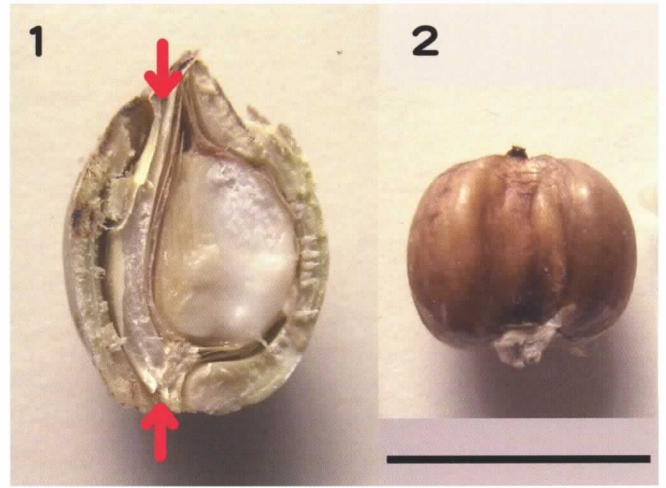


写真3. 1. ジュズダマの断面、矢印の部分に穴があいている。
2. ハトムギにそっくりな本当の果実。スケール：5mm

と雄花の軸の部分が、ぐるりと苞葉鞘に包み込みこまれている構造がわかります（写真3-1）。果実は苞葉鞘の内側で成熟し（写真3-2）、苞葉鞘ごと脱落します。

この熟した「じゅずだま」のてっぺんの芯（退化した小穂と雄花の軸が枯れたもの）は簡単に引き抜くことができ、ビーズのような穴があきます。素材がすぐ使える状態にあることは、創作意欲を刺激します。ジュズダマが重宝され、畑で栽培までされている理由は、この天然の糸穴にもありそうです。

今年の冬は、あなたもジュズダマで遊んでみませんか？
（写真4） （総合研究博物館 研究支援推進員）

参考文献

「植物のビーズおしゃれ！ジュズダマ」鹿児島大学総合研究博物館ニュースレターNo.11（2005）（<http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/>）の出版物のページからPDFファイルとしてダウンロードできます。ジュズダマの魅力のとりこになること間違いなし。）

堀田満ら（編）（1989）「世界有用植物事典」平凡社、東京。



写真4. ジュズダマとガラスビーズでトンボ玉風に

弥生時代の実年代(3)

岩永省三

この連載の（1）（2）ではAMS法の方法と試料を紹介した。今回は趣向を変えて歴博年代論に対する考古学者の対応を一瞥しよう。

日本の考古学者の多くは（私自身も）、アメリカやイギリスの先史学者と異なり、もっぱら「文科系」の教育を受けてきたので概して自然科学に弱い。それもあって、自然科学的方法で出された結果なら、無批判に「正しい筈だから信じてしまおう」とする傾向無きにしも非ず。勝ち馬に乗ろうと言うわけでもなからうが、歴博年代論

が発表されると、それを支持する考古学者の論考が一斉に各種現れた。

支持するとは言っても、歴博年代は従来の年代観より500年も遡るから、考古学的資料からそれなりの根拠で築かれてきた従来の年代観を簡単にご破算にはできない。弥生時代の実年代を考古学的に把握するには、土器編年で日本列島と朝鮮半島、朝鮮半島と遼寧地域（中国東北部）、遼寧地域と中原（中国中心部）をつないだ上で、朝鮮半島や列島に到達した製作年代が判明する中原製遺物を拠

り所とするのが手堅い方法である。もちろん土器編年はクロスデイトイングできていることが好ましいが、必ずしも時期や地域によって可能とは限らず、加えて、実年代の判明する遺物の移動は中原→遼寧→朝鮮半島→列島への一方通行であるから、青銅武器や鏡などが、ある土器様式の上限年代を示すにしても、それをただちに年代の定点とはできない難点がある。

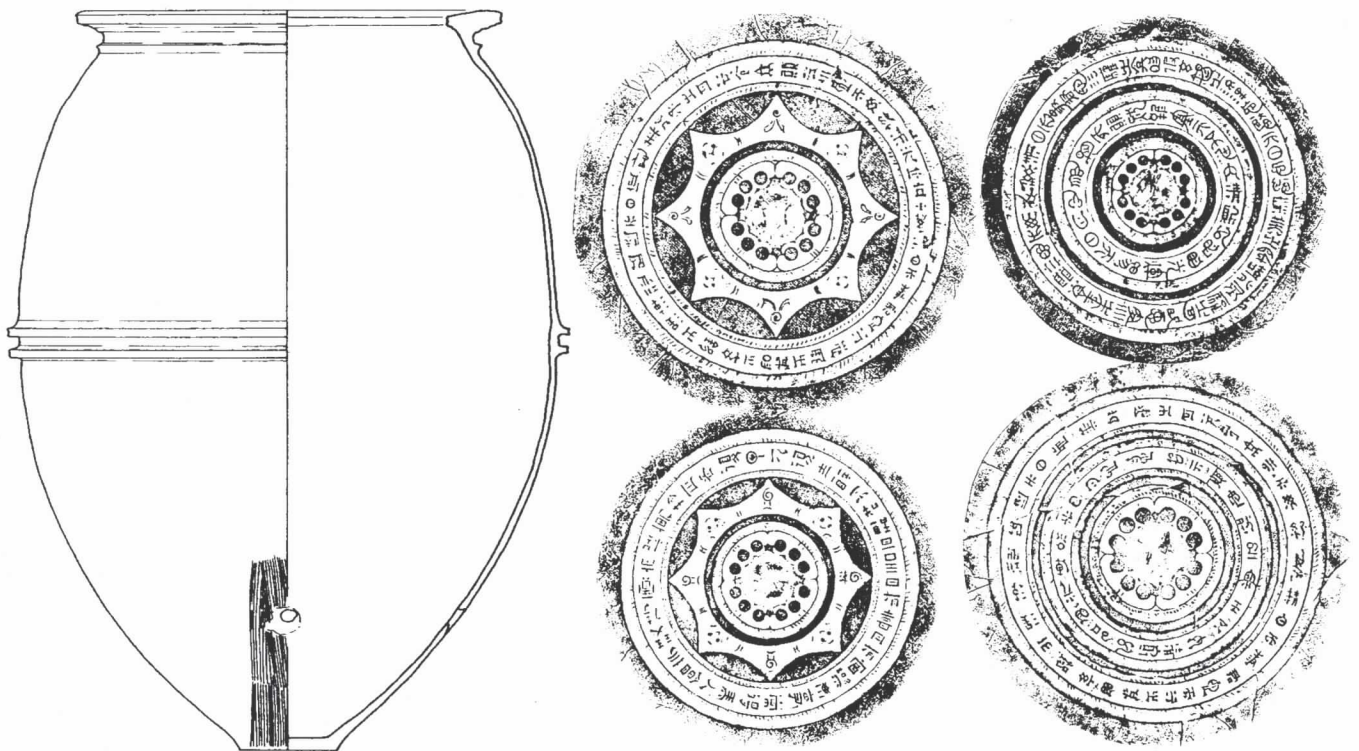
そうした困難はあるものの、弥生時代中期後半以降の場合、中原の帝国（前漢・新・後漢）から輸入されて甕棺墓に副葬された各種の鏡の製作年代が細かく判っており、鏡を出土した甕棺型式の年代の上限は決まるから、それを越えて年代を古くすることはまったく不可能だ。そこで、中期前半以前、とくに弥生早期・前期の年代を間延びさせて引き上げるしかない。

では、従来は弥生早期～中期前半の年代をどのようにして決めてきたのか。この時期と、朝鮮半島・遼寧地域の諸文化との年代的併行関係はある程度わかっているし、朝鮮半島・遼寧地域製の青銅器が列島に輸入されているから、それらの年代がわかれば良いのだが、漢代の鏡とは異なって製作年代が絞り込まれていないものが多いから、すぐには使えない。そこで、中期後半以降につい

て推定可能な土器1型式の年代幅を、中期前半以前についても同様と仮定して、早期～中期前半の土器型式の数に掛け合わせて求めてきた。遼寧地域・朝鮮半島の青銅器文化の年代観も、こうして得られた弥生早期～中期前半の年代観と矛盾しないように推定してきたのが学史の実際であったから、再検討の余地があったのは確かである。

そこで、歴博年代論を支持する中国考古学者は、遼寧地域・朝鮮半島の青銅器文化の年代観を、弥生早期・前期の既成の年代観と切り離すべく再検討を始めた。遼寧地域の西半分に入っている中国中原製青銅器が僅かながらも増えてきたので、それらを用いて遼寧青銅器文化の年代を改訂し、朝鮮半島で遼寧青銅器を模して作られた石器・青銅器の年代をも改訂しようというのである。彼らによる新しい遼寧地域・朝鮮半島青銅器文化年代論は、歴博年代論をオーソドックスな考古学的方法によって裏付けようとしている点で重要であり、その吟味は歴博年代論を支持するしないに関わらず避けて通れない。私は中国考古学の専攻者ではないのだが、中国考古学者が展開する論理を把握することはできるので、批判的に検討を試みることにした。（以下次号）

（総合研究博物館一次資料研究系 考古学）



甕棺と前漢鏡：福岡県飯塚市立岩遺跡10号甕棺出土

甕棺は中期末で高さ117cm。
前漢鏡は前1世紀前半～中頃で、左上は直径18.0cm。

骨格標本室の公開開始



博物館ニュースNo.6で紹介しましたが、2005年度に、それまで比較社会文化研究院（六本松地区）が所蔵し医学部に保管されていた貴重な骨格標本が、箱崎キャンパス旧知能機械工場建物2階に移転されました。その収蔵展示施設の整備が進んだため、2006年5月の九州大学開学記念日行事の一環として、「骨格標本室」の一般公開を行い、あわせて『九州大学教育・研究の最前線—P&P研究成果一般公開—』展、『九州大学所蔵自然史標本・資料の写真展』を行いました。期間は2006年5月9日～6月9日、12:00～17:00（5月11日～14日のみ10:00～17:00）でした。

○骨格標本室の記者発表・内覧会・一般公開

骨格標本室には、古人骨資料約3000体、動物骨格標本約200体があり、質・量ともに日本有数のコレクションです。そのうち動物骨格の大半と古人骨約70体を二つの展示室に展示しました。一般公開に先立ち、5月8日の14:30から記者発表、15:30から内覧会を行い、どちらも、比較社会文化研究院の田中良之教授に、資料の来歴や学術的価値、移転の経緯についての解説をお願いしました。内覧会には、移転以前に整理や研究を推進された先生方、今回の移転や建物の整備に尽力下さった方々をお招きし、興味深いお話を伺うことができました。また新聞各紙に掲載された効果もあり、一般公開の期間中は、1075名の方にご覧頂きました。

○『九州大学教育・研究の最前線—P&P研究成果一般公開—』展

本展示は、九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトに採択され、すでに成果を上げて終了した課題の中から、21課題の成果を紹介しました。今回初めての公開となる14課題に加えて、昨年度に第4回P&P展で紹介した7課題もまとめて展示し、九州大学で日々行われている教育と研究のまさに最新・最先端の一端を学内外に広く紹介しました。

○『九州大学所蔵自然史標本・資料の写真展』

九州大学の創設以来、教育・研究をつうじて収集された多岐の分野にわたる標本・資料は750万点を超えており、その質と量において、国内一級の自然史博物館と肩を並べるものとなっています。これらの標本はこれまでに九州大学で行われてきた研究結果を保証する物的証拠であるとともに、今後の新たな研究を展開するための材料でもありますが、そのほとんどが個々の研究室に保管され、各専門分野の研究者以外には存在すら知られていないものが大半です。そこで本展示では、九州大学が所蔵する自然史系標本・資料を選びすぐって、写真で紹介しました。膨大な資料のごく一部ですが、あらためて九州大学所蔵資料の価値を学内外で見直して頂く契機となりました。

(岩永省三 総合研究博物館)



永井昌文博士によるゴホウラ貝輪製作実験資料(骨格標本室で展示中)

空と海ののりもの展（第7回 総合研究博物館公開展示）

期間／平成18年7月21日～8月30日(九大担当:海ののりもの展 8月9日～8月30日)

会場／福岡市立少年科学文化会館 1F 学習室



第1回の福岡市立少年科学文化会館との合同企画展として「空と海ののりもの展」を開催しました。九州大学担当の「海ののりもの」展では、工学部の海洋システム工学部門における研究成果が分かりやすく展示・公開されました。大型水槽を使った実験や、「ぼんぼん船」の工作もできました。期間中の来場者は約9000人、そのうちの6割は小学校低学年であり、盛況のうちに終了しました。

(宮崎克則 総合研究博物館)



九州大学総合研究博物館 常設展示

会場／九州大学箱崎キャンパス 50周年記念講堂 2F

テーマ／1800年ころのニッポン -シーボルトがとらえた日本の社会と自然-

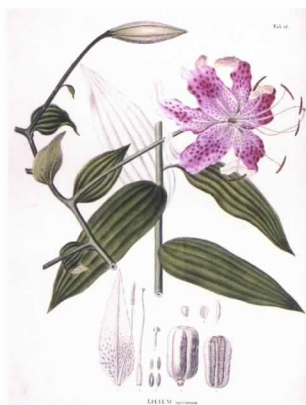
シーボルトは、文政6年（1823）、長崎の出島にあったオランダ商館の医者として来日し、鳴滝塾で高野長英ら数十名の門下生に医学・博物学などを教えました。彼は、日本とその周辺地域の調査・研究を行い、帰国後に『日本』『日本植物誌』『日本動物誌』を自費出版します。

九州大学附属図書館医学分館には、大正15年に医学部法医学教室が3000円で購入した『日本』が所蔵されています。これは未製本の初版本であり、出版当時の様子をそのままに伝えている、世界的にも少ない貴重な資料です。

今回は『日本』初版本（複製）とともに、昭和初期に日本で復刻された『日本植物誌』『日本動物誌』、そして「シー

ボルト事件」で江戸幕府が取り上げた日本図を展示しています。

(宮崎克則 総合研究博物館)



次回講演会のご案内

平成18年度九州大学総合研究博物館公開講演会

『よみがえる標本—骨・動物・ヒト—』 2006年10月21日(土) 13:00から

九州大学箱崎キャンパス 50周年記念講堂 4階大会議室

13:15 「小型哺乳類と標本」 毛利孝之先生(九州大学農学研究生院生物資源開発管理学部門 動物昆虫学分野)

14:15 「遺体科学の挑戦」 遠藤秀紀先生(京都大学霊長類研究所進化系統研究部門 形態進化分野)

15:30 「人骨から見える古代社会」 田中良之先生(九州大学比較社会文化研究院環境変動部門 基層構造分野)

同時開催

「骨格標本一般公開」 2006年10月21日(土) 10:00～17:30

九州大学箱崎キャンパス 総合研究博物館骨格標本室(旧知能機械工場2階)

お問い合わせ：九州大学総合研究博物館事務局 (TEL/FAX 092-642-4252)

活動状況（展示・講演会関係）

公開展示・特別展示

平成18年5月9日～6月9日

「九州大学教育・研究の最前線-第5回P&P研究成果一般公開-」展を、九州大学箱崎キャンパス旧知能機械工場建物を開催しました。同時開催で、骨格標本室の一般公開、ならびに九州大学所蔵自然史標本・資料の写真展を行いました。

平成18年7月21日～8月30日

公開展示「空と海ののりもの展」を福岡市立少年科学文化会館で開催しました。今回は、福岡市立少年科学文化会館との初の合同企画展として行いました。



講演会

平成18年3月5日

九大・糸島会主催 第10回地域資源再発見塾可也山シンポジウム「歴史に学び、魅力と未来を語ろう」を志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」にて開催しました。午前中の可也山登山の後、丸山雍成九州大学名誉教授をコーディネーターとするパネルディスカッションが行われました。112名の参加者が熱心に質問し、閉会の時間が若干延長される程盛況でした。

サテライト展示

●福岡空港 第1ターミナル2階待合室
平成18年6月8日～

倭人伝の道と北部九州の古代文化(1)

平成18年10月中旬～

倭人伝の道と北部九州の古代文化(2)

●前原市伊都文化会館

平成18年4月16日～9月2日

「九州の地下資源(地熱3)」

平成18年9月3日～

「川と海の生命展(川の生命1)」

●志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」

平成18年4月16日～7月9日

「福岡県で絶滅に瀕している貝たち」

平成18年7月10日～9月2日

「福岡県で絶滅に瀕している魚たち」

平成18年9月3日～

「川と海の生命展(マリンバイオ1)」

●二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」

平成18年4月16日～7月9日

「福岡県で絶滅に瀕している魚たち」

平成18年7月10日～9月2日

「福岡県で絶滅に瀕している貝たち」

平成18年9月3日～

「川と海の生命展(とる・つくる・そだてる1)」

活動状況（その他）

平成18年3月31日

村江達士館長、都築健二専門職員が定年退職されました。外部評価報告書を発行しました。箱崎キャンパス旧知能機械工場建物の改修工事が終了し、博物館の新たな収蔵・展示スペースができました。

平成18年4月1日

鳶 洪館長、ならびに木下隆司専門職員が着任されました。

平成18年5月8日

骨格標本室(旧知能機械工場)開所式を開催しました。



木下隆司専門職員

平成18年6月22日～23日

北海道大学で第9回国立大学博物館等協議会が開催され、鳶 洪館長と松隈明彦副館長、木下隆司専門職員が参加しました。今回から、博物学会も併せて開催されるようになり、各国立大学博物館等の参加者が研究発表を行いました。次回協議会・博物学会を九州大学で開催することが決まりました。

運営委員会

平成18年3月6日、3月9日(書面)、3月16日(書面)、4月27日、5月15日(書面)、5月29日(書面)、9月13日(書面)

九州大学総合研究博物館ニュース

The Kyushu University Museum News

No.7, October 2006

発行:九州大学総合研究博物館 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

TEL & FAX 092-642-4252 ホームページ <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印刷:城島印刷株式会社 〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 TEL092-531-7102 FAX092-524-4411